

セゾン AIR パートナシップ:デジタル・レジデンシー

Mapped to the closest address 「オープン・フォレスト・ローンチ」

セゾン文化財団では、アート・コレクティブ Mapped to the closest address と共同し、東京とベルリンでのアート活動をつなぐデジタル・レジデンシー、「オープン・フォレスト・ローンチ」を実施します。

「オープン・フォレスト・ローンチ」では、非人間の視点から時間を知覚する可能性を探るべく、バクテリアからアボカドの木にいたるまでの様々な生物、それらが生息する生態系と風景を、東京とベルリンで並行して探索・観察します。東京とベルリンの連絡はファックスというアナログな手法で行いますが、このパフォーマンス制作プロセスは各スタジオに設けたリゾーム型のデジタル・アーカイブによってオンライン上で日々共有されますので、ぜひ、ご高覧ください。




2020年10月15日(木)–11月2日(月)

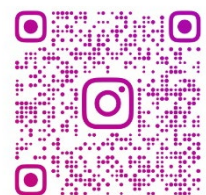
東京 [森下スタジオ] 吉田駿太郎 前野真榛

ベルリン [エル・アレノ・ユミタ] アレックス・ヴィテリ カタリーナ・フェルナンデス

URL: https://www.instagram.com/saison_air/

※動画ライブ配信も交えたオープンスタジオやトークを開催予定。

助成: 令和2年度アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化促進事業  文化庁



SAISON_AIR

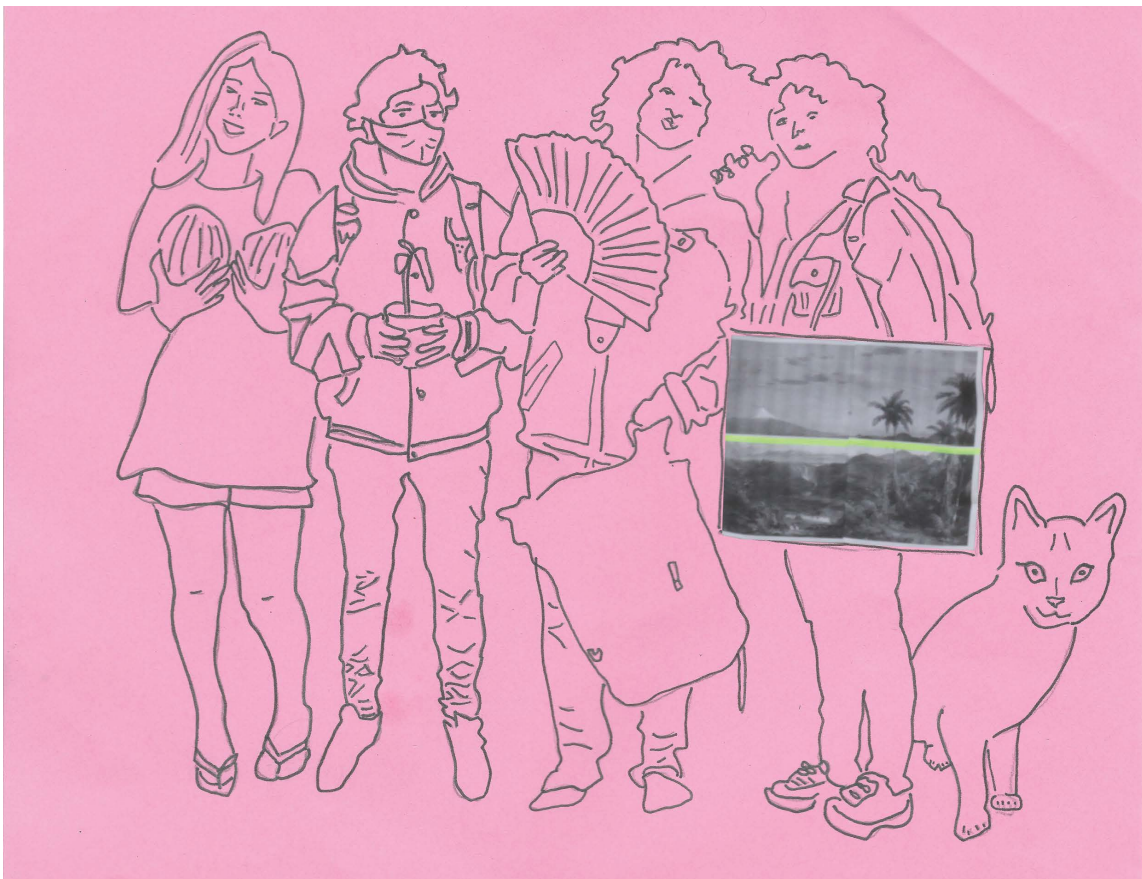
オープン・フォレスト・ローンチ

海を越えて、マクロとミクロの生態系を共に遊歩する (東京／ベルリン)

都市でのロックダウンが始まった頃、私たち、アート・コレクティブ Mapped to the closest address は非人間との関係を様々な形で探っていくアート・レジデンシーの準備をしていました。日本の実地でのレジデンスは延期されましたが、活動は継続しています。現在、Mapped to the closest address はデジタルで集うように誘われ、一見不協和音に満ちたこの時間を超える方法を模索しながら、海を越えて集団創作を進めています。幸福にあふれ、永遠に成長し続けるアーティスト・グループのメンバーとして、私たちは人間ではないものの力の理解に注力しています。

現代の市民として人間の視点を問いたすことを望み、舗道のひび割れに棲む微生物、コンクリートを通り抜ける植物、そして私たちの中で成長するバクテリアのコロニーと接触したいと願っています。私たちは歴史的／社会的／政治的な風景を問うために、ダンススコアを用いて、集団的に実践を織りなします。更に、リサーチでは、発見したことをどのように記録し、それをどのようにライブパフォーマンスに翻訳するのか、という問いを生み出し、派生させます。このパフォーマンスの制作プロセスを共有するため、多くの足と吸盤をもつタコのような、リゾーム型構造のデジタル・アーカイブを作成することにしました。また、理論的な枠組みの構成元となっているテキスト及び、現在の文脈の中で新たな響きを生むマテリアルも収集し、アーカイブに含める予定です。

Mapped to the closest address



方法論に関するノート

わたしたちのコレクティブは、現在、地理的に離れた2つの場所*で2つの庭を手入れしています。吉田駿太郎と前野真榛は現在日本で生活し、吉田の父親とベランダ菜園を共有しています。カタリーナ・フェルナンデスとアレックス・ヴィテリは、ドイツのマルケンドルフにある貸し農園に参加しました。

この1ヶ月間、生物や人間以外の生命体の物質的条件を反映したテキストの読解と、ガーデニングの実践を結びつけてきました。草取りをして土を整え、種を蒔き、茎があらわれるのを見ました。バクテリアの生命活動に触発されて、発酵と摂取のプロセスを追加することも議論してきました。これらの実践を、前野と吉田がスタジオで翻訳します。二人が東京を訪れ森下に滞在する間、カタリーナとアレックスは庭に拠点を置きます。プロジェクトの次なる段階では、ファックスのみでコミュニケーションを取りながら、メンバー共同でデジタル・アーカイブにメディアを追加していきます。オープンソースのツールを使い、直線的な時間に縛られない語りの実験を行います。わたしたちが興味を持っているのは、コラボレーション方法と知識の共有に関する、オルタナティブなあり方を調査することです。

また、このレジデンスは、庭の内外の風景を探求し、滞在先の人間や人間以外の住人と接触する時間でもあります。こうした周囲の物事を記録するため、デジタル・アナログ両方の機械も準備しました。これらのリサーチでは、ミクロなものに接触し、ミクロなものの特徴を私たちの振付の概念へと翻訳することで、私たちの戦略と方法論を探求し、充実させます。たとえば、私たちは人間以外のものの視点から時間を知覚する可能性に取り組みたいと考えています。ここにおいて、どのように私たちは身体運動を通じて、地質学的なリズムを翻訳するのか、という問題が浮き彫りとなるのです。

集めたマテリアルは毎日アップロードされ、オンラインで閲覧できるようになります。電子的・物理的なリサーチを通して、その間にある世界、より支え合い、バランスのとれた未来を想像できるような、どこにもない空間を作りたいと考えています。

庭が大きくなってから、いつもその存在を気にするようになりました。時には、小さな昆虫の生きるための営みにさえいらだってしまいます。タコがいるとほっとします。タコの一見不器用なところを見るのが好きです。その姿からは山を連想します。雨が降ると、水の中から頭が飛び出してくれます。タコの脳は雪山の頂上のように、神経は山々の川のように、触手は根っこのように水面下に生えています。タコはいくつかのものを触ったり、感じたりするのがとても速いことで知られていますが、ゆっくりと味わうのが好きなものもあるようだ、と観察していて気づきました。バクテリアも不安定な時間を保っています。種々の生き物が住まうわたしたちの庭は、ゆっくりと成長しています。デジタル・アーカイブもそれに合わせて成長していかなくては。近いうちに、いまいる場所のイメージを共有します。気に入っていただけたら幸いです。

Mapped to the closest address

*このコレクティブは、各自のパートナー同士の交流にも基づいています。

アーティスト・プロフィール

アレックス・ヴィテリ ダンス研究者、パフォーマンス作家

1987年生まれ。主にニューヨークとベルリンにて活動。ドラマトルクとして、振付家や美術家とも協働。振付家のジュリアナ・ピケロおよび照明／音響デザイナーのカタリーナ・フェルナンデスとの協働による新作『Fan de Ellas』を、2019年11月にソフィーエンゼーレにて初演。ニューヨーク市立大学演劇パフォーマンス研究科博士課程にて研究を行う一方、ハンター大学にて教鞭を執る。

カタリーナ・フェルナンデス 照明・音響デザイナー

1977年生まれ。主にベルリンで活動。演劇、ダンス、舞台以外の環境におけるパフォーマンスを対象として活動。現在は振付家のジュリアナ・ピケロ、音楽家のハンス・アンスターンと協働。2017年、アート・コレクティブのフェラス・パブリッシング・プラクティスズとしてビデオインスタレーション『Soapy Postmodern Bathwater』をシャルジャビエンナーレに出品。2018年、ドイツ・ベルリン州文化ヨーロッパ局より調査給付金を受給。

吉田駿太郎 ダンサー・振付家、コンテンポラリーダンス及びパフォーマンス研究者

1989年宮城県生まれ。2020年、東京藝術大学大学院音楽研究科 Ph.D.(学術)。2017年-2019年、日本学術振興会特別研究員(DC2)。近年の振付作品に以下の二つがある。アレックス・ヴィテリとの協働による『Migration in Red Pepper』(2018年-2019年、ニューヨーク巡回パフォーマンスアート芸術祭・アートスペース デコンストラクト主催事業)。『Of Chroma』(2019年、ニューヨーククイーンズ美術館主催)。

前野真様

1994年茨城県生まれ。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科卒業。食品を素材にしたアート作品の制作、パフォーマンスやアートプロジェクトの企画運営を行う。主な作品に『the Museum of Make-up Art』(FIGMENT、ニューヨーク)、『RedHook Horror Lemonade』(De-Construct、ニューヨーク)、『霞か雲か』(MEXT、東京)がある。De-Construct スタジオアシスタントを経て、現在は京都で展覧会 360° アーカイブ事業 ART360 のプロジェクトマネージャーを務める。